

プログラム実施児童館の視察報告書

視察児童館	秋田県立児童館（秋田県秋田市）	視察日	平成28年8月19日（金）
視察実施委員等	鈴木委員長 田口専門官	報告書作成者	鈴木委員長
プログラム名	五感を磨き、「生」を楽しむプロジェクト		

視察日に行われたこと

「夏休みの思い出としてそうめん流しと花火をともに楽しみ交流する」プログラムを実施した。

視察実施に関する所見

①児童会館のモデルプログラムへの参加動機について

「NPO法人あきた子どもネット」が指定管理を受託する前後、秋田県立児童会館は幼児の砦のようであった。子育て支援には対応しているが、小・中・高校生への視点は薄いように感じられた。

子どもにとって児童会館へのアクセスは悪いが、来館児童の増加については常々工夫する必要を感じており、今回の調査研究業務委託事業によって活路を拓こうと欲するの応募になった。

②プログラムへの子ども意見聴取について

常連の中高生に「遊びのプログラム」への参加の声かけをして、子ども会議も開催する予定だが、一堂に集まれる人数や時間の調整が難しいため、個々に子どもへの接触機会を捉えて時々声を反映したという。

③プログラム実施状況

エントランスに、ボランティアの大学生たちが6～7メートルの流しソーメンの竹具を設置した。

視察実施に関する所見（続き）

館長が、参加予定児童（当日欠席多）と在館児童にも声掛けして募り、20名ほどをエントランスに集め、学校や仲良しグループ別に3班に分け、挨拶の中でプログラムの意図を説明して、自らがソーマンを流す。

子どもたちに竹筒を挟んで食しながらの自己紹介を促し、児童相互交流のきっかけを仕掛ける。

また、子ども達の帰宅時間の関係から薄暮の18時30分頃より花火大会を実施し、職員・ボランティアが見守る中で子どもたちが花火を楽しみ、夕景の夏の暑気払いの花火の美しさの中に情緒を共有した。

④プログラムへの所感

プログラムを視察して印象深かったのは、すべて館長が陣頭指揮をしていたことである。それは立派なことであるが、子どもたちのプログラムの認識や参画意識、準備・役割・実行・責任分担や、職員の役割分担などが見えてこない。

子どもたちや関係するすべての人に対して、企画提案された「遊びのプログラム」の内容や実施への合意形成が出来ていたのかが気になるところである。

児童館に関する所見

秋田県立児童会館は、小・中学校からのアクセスが悪く子どもが単独徒歩で通いにくい立地条件にある。加えて秋田県は南北に長く、児童館は93館（H26 10.1現在）児童人口は近年全国最少で11万人ほどである。

秋田市に限っても小学校41校、児童館42館、保育所55園、放課後児童クラブ34クラブ、1,257人（H27.5.1現在）である。児童人口は5万人弱（H27.10.1現在）に及ぶ。

児童会館の年間来館者数は平成27年度、劇場、その他入場者を含めて134,398人、うち児童会館の来館中高生は507人である。年代別のデータは集計していない。

県立児童館の特徴は県全域を視座におくものであり、今回の「遊びのプログラム」からどのような効果を得て、どのように県内に伝達していくのかが今後の課題となる。

その他

今回の調査研究業務委託事業の実施に至る経緯は、秋田県子育て支援課が厚生労働省主催の主管課長会議の中での少子化総合対策室の説明で情報を把握し、県児童会館に情報提供したことが切っ掛けと聞いた。

県児童会館では、館長と幹部が相談して館長がコンセプトを考え、班長が遊びのプログラムを企画して子どもたちに提案した。当日のプログラムを視察すると、館長が三面六臂の活躍であった。来館児童を含めて職員相互のコンセンサスが得られていたのかどうか、視察をされていて気になった。

企画案によると県内児童福祉関係者・有識者・地域住民等を招聘した企画実行委員会を3回開催することになっている。当初この企画実行委員会を視察予定であったと思うが、当日は1番目のプログラムに変わっていた。全貌が垣間見えず、少々残念であった。

プログラム実施児童館の視察報告書

視察児童館	新座市児童センター（埼玉県新座市）	視察日	平成28年8月20日（土）
視察実施委員等	鈴木委員長	報告書作成者	鈴木委員長
プログラム名	あそびサイエンス		

視察日に行われたこと

「星のプログラム」について、子ども達の意見を聞く場として「子ども会議」を実施した。

視察実施に関する所見

① 調査研究業務委託事業への参加動機について

新座市児童センターを運営している「NPO法人新座子育てネットワーク」は、市内の児童センター2施設の指定管理を受託している。

子どもの日常生活は科学技術に囲まれているが、子どもたちが科学的な好奇心に目覚めているとは言いがたい。現代社会に生きている子どもたちにとって、科学的感性が生活に根付くことは重要である。

したがって、児童厚生員の科学遊びの技術向上と児童センターの環境整備を図りながら、科学と出会う身近な機会を児童センターが創出し提供することを目的として「あそびサイエンス」を企画し、当該調査研究業務委託事業に応募した。

② 「あそびサイエンス」参加対象児童と勧誘方法

小・中学生を主な参加対象とし、低学年児童等には保護者同伴とした。ボランティアには高校生を含めている。星空観察やプラネタリウムなど宇宙科学に興味のある児童を中心に勧誘して委員を募る。当日は台風の影響による大雨のため委員の出席が悪く、館内の高校生にも急遽声かけをする。

視察実施に関する所見（続き）

③当日の「子ども会議」の実施状況

館内アトリエ室にマットを敷き座布団代わりにする。館長の進行により、6名（小学3年生1名、中学3年生1名、高校1年生1名、高校3年生3名）と担当職員1名で会議を始める。冒頭、館長より「あなたが作りたいプラネタリウムのプログラム案について話し合っ、具体案を決めることが会議の目的です。」と、趣旨説明をした。

高校3年生の3名は支援学級の子どもたち。他の委員の意見に驚いたり、冗談を言ったりしながら楽しげであった。

小学3年生男子が、①ギリシア神話に登場する星座はどのような星か？②惑星が消滅したら太陽系宇宙はどうなるのか？③自分の生まれ月と星座の関係等をプログラム案として提案した。宇宙に対する知見の深さ、認知力、表現力は抜群で意見の端々から母親の影響を感じさせられた。

高校1年生の女子は浴衣を着てきちんと正座し、他の児童の意見を補足しながらまとめていく調整力の高さに感心させられた。

児童館に関する所見

キャンプ場（屋外隣接）、プラネタリウム（2階）、ステージ付きのプレイルーム、駐車場29台を要する児童センターである。

バーコードによる「モリモリメンバーズカード登録シート」により一人ひとりを管理できる。

6人掛けテーブルが6卓おける広いロビーで、中学生が「カードゲーム」、高校生が「百人一首」と三々五々思い思いに過ごしていた。

地域の児童センターとしては恵まれた施設である。

「星空観察会」「お父さん盛上げ隊」、隣接農家との農業体験交流など、地域に拓かれた活動を多彩に展開している。

今回企画提案されたプログラムをどのように日常活動に具現化して行くのか参考にさせて頂きたい。

その他

当該調査研究業務委託事業については、他のNPOからの情報提供を真摯に受け止めた。同時期に、館長代理もインターネットで情報をキャッチし、館長と相談して応募を決定したとのこと。

館長、館長代理が草案として「遊びサイエンス」のコンセプトを発案。他職員と企画内容を検討し、子どもたちに提案した。今後、子どもの意見を企画に反映しながら進行していく予定という。

当日は館長が進行役、担当職員が専門知識を提供。当日参加は小・中・高生6人と少人数であったが予想外の悪天候や、児童センターの他職員3人が随時参加していく様子を見ていると、全員が事業を認知していることがうかがえた。

プログラム実施児童館の視察報告書

社会保障審議会児童部会
第8回遊びのプログラム等に関する専門委員会

資料
2

平成28年10月17日

視察児童館	さぬきこどもの国（香川県高松市）	視察日	平成28年8月26日（金）
視察実施委員等	鈴木委員長 田口専門官	報告書作成者	鈴木委員長
プログラム名	「行きまっせ！ さぬきこどもの国 うどん県巡業」		

視察日に行われたこと

「遊びのプログラム」参画の県内児童厚生員がさぬきこどもの国に集まりプログラムを推敲する実行委員会を実施した

視察実施に関する所見

- ① さぬきこどもの国の当該調査研究業務委託事業への参加動機について
大型児童館の使命として、さぬきこどもの国で好評を博したプログラムを県内の地方3か所を拠点に実施することで、地域児童館の活性化と併せて、地方の住民に高松市に設置されている「さぬきこどもの国（県立児童館）」の活動の周知を図るため。
また、企画段階から地域の児童厚生員とこどもの国スタッフが関わることで、相互理解と全県一体となって健全育成の広報・啓発を進めることへの連帯意識の向上を図ることである。
- ② 実施プログラムへの子ども参加の態様について
香川県内3会場で、当該地域に在住する子育て家庭を中心した方々を各会場200名募集し、代表による地域実行委員会を結成する。
それぞれ当該地域ごとにプログラムの構成と推敲を図る。
こどもの国スタッフが運営支援する。

視察実施に関する所見（続き）

③視察時のプログラム実施状況

モデル児童館の実行委員会を27児童館で結成。当日の参加委員は14名。

実行委員会をさぬきこどもの国が主催して開催すると共に、全県を3ブロックに分けて3会場で地域特性を演出したステージ企画案で実施することとする。そのため視察日の実行委員会も後半は3ブロックに分かれて分科会で進行された。

④「第一回モデル児童館実行委員会」オブザーバー参加の所感

会議は全体会と分科会の二部構成で進行された。

すべての協議の終了後、委員会の結論として、3地域ごとに地域児童の参加を呼び掛けて地域実行委員会を開催、当日の具体的プログラム立案の検討会を実施することになった。

スタッフの明快な説明と司会進行、和気あいあいとした分科会の雰囲気の中で、小豆島地域は特産品オリーブを企画の中心に、志度地域は忍者あそび、宅間地域は楽器演奏等、それぞれの特徴を提案し合っていた。

地域児童館と県立児童館の職員間の意思の疎通、相互理解という事業目的の半分は達成しつつあると感じた。

児童館に関する所見

さぬきこどもの国は、香川県の高松空港の南に滑走路に沿って隣接し、公園や自転車コースを始めプラネタリウムや大型遊具設備や実物YS11飛行機も備えた、香川県唯一の県立大型児童館であり、子どもの最善の利益を保障し県内全体の健全育成機能を果たすことを目的としている。

空港隣接という特殊な立地条件により県内外の耳目は集めているが、子どもが日常的に単独で遊びに来られる場所ではない。幼稚園・保育園、学校、子ども会などの遠足場所か、家族連れでマイカーにより訪れる子どもを対象とした行楽施設という色合いが強い。

児童館に関する所見（続き）

児童館は接触可能展示の常設と共に、美術・科学・音楽の工房を備え、それぞれに卓越した職員を擁している。その特技を生かして、館内の演奏やクラブ活動以外にも、県立児童館の目的である地域児童館の巡回による、質の高いオリジナリティ溢れるプログラムの普及・啓発に力を入れている。

今回の遊びのプログラムによって、地域児童館との紐帯を深め、県内一体となって、子どもの健全育成に実証的に資するプログラムの浸透を図ることで、県立児童館としての意義を高めることを目的としている。

その他

①「モデル児童館」実施に至る経緯

香川県担当課からさぬきこどもの国に情報提供があり、園長が参加意思をもって育ち支援課長と3人のリーダーに相談し、積極的賛同を得て応募を決定したという。

「第1回モデル児童館実行委員会」の運営を視察すると、県立児童館内の意思疎通の高さが推察される。

②実施担当者の役割

育ち支援課長とリーダー3人が遊びのプログラム案を企画して、全県下の児童館に提案した。

前記実行委員会の司会進行と遊びのプログラム実施の意図・企画案の説明を傍聴すると、育ち支援課長と3リーダーの積極性が伝わる。

27児童館が参加を表明したことと、3ブロックごとにこどもの国の3リーダーが各1名、連絡調整役として所属しての分科会の親しげで実のある協議も相互信頼の深さを実感できた。

その他（続き）

③実施ポイントの状況

指定管理の3期目にあたり、県立児童館としてのあり方を改めて見直した時に、県内児童館興隆支援の重要性に思い至った。そのためには地域児童館との紐帯を強化し連帯感を深めることが重要であり、さぬきこどもの国発信で県内児童厚生員の意見を聴取しながら、連携して遊びのプログラムを実施することの必要性を感じたそうである。

そこに、香川県の地域性、歴史文化、特産品を子どもたちのアイデンティティにするために、「うどん」を共通のモチーフとしたことは、分かりやすく子どもの自尊感情を高めるのに香川県の児童館らしいオリジナリティにあふれていると思えた。

プログラム実施児童館の視察報告書

社会保障審議会児童部会
第8回遊びのプログラム等に関する専門委員会

資料
2

平成28年10月17日

視察児童館	ももやま児童館（京都府京都市）	視察日	平成28年8月27日（土）
視察実施委員等	植木委員 田口専門官	報告書作成者	植木委員
プログラム名	「さびしいを減らしていく！！」桃山の街あったかプロジェクト		

視察日に行われたこと

「さびしいを減らしていく！！」桃山の街あったかプロジェクト

第1部「銭湯みたいな勉強部屋」

第2部「みんなおいで！いっしょにたべよ！～ももやま あったか食堂～」のプログラムを実施した。

視察実施に関する所見

一般的には、児童福祉の事業が実施される場合、その対象が限定されることが多い。しかし、本プログラムの理念は、「0歳から100歳余の人々の豊かな日々の具現化」であり、当該地域のすべての世代の人々が、互いに意識的に子どもたちにかかわれるような工夫がされているところに特徴がある。

本プログラムには、勉強部屋（学習支援）やあったか食堂（子ども食堂）といった、子どもの現代的課題に対応する内容が含まれている。これらに対応するためには、児童館の限られた人数の職員だけでは不可能であり、地域の人たちの協力が必須であることを前提としている。

プログラムを複数回実施することによって、前回参加した子どもたちが、今回のプログラムに期待をもって参加するようになっている。このような意図的な工夫が、プログラム準備と実施に対する子どもの主体的な参画を可能としている。また、このようなプログラムの繰り返しが、結果的に児童館と子どもたちとの長期的、継続的なかかわりにつながるものと推測される。

視察実施に関する所見（続き）

地域の多様な人々がプログラムに参画することによって、子どもたちが地域住民を身近に感じるきっかけとなっている。定期的、継続的なプログラムの実施が、児童館だけではない地域全体で健全育成をすすめる基盤となることが想定され、多様性に対応可能なコミュニケーション能力を必要とする子どもの成長発達に寄与することができる。

児童館に関する所見

児童館として、本プログラムのような大きな事業の実現には、当該児童館の限られた人数の職員だけでは不可能であることがわかっている。そこで、地域の人たちを児童館に集めることによって、実現可能となるようなプログラム構成としている。そのために職員は、普段から地域とのつながりを重視して日常的なかかわりを持つことを仕事の一部として認識している。

児童館の職員は、子ども支援や子育て支援に携わっている地域のマンパワー（民生委員、母親クラブなど）を把握することによって、児童館と地域との連携を可能としている。また、地域住民の会（おやじの会など）や老人会、近隣の大学などにも連携の幅を広げているため、日常的な多世代交流が生まれ、今回のようなプログラムの実現が可能となっている。

児童館だけではできないような地域福祉ニーズ（ひとり親家庭や中高生への対応など）の把握について、民生委員や社会福祉協議会のような地域の有識者と連携することによって、児童館でも把握することができるようになり、地域福祉ニーズを反映しながら児童館プログラムを実施することができる。

その他

地域住民の会（おやじの会など）、老人会、大学などは、子ども支援や子育て支援を進めるための活動拠点を地域の中を探している。彼らにとって、児童館と連携することは、活動拠点の確保に成功すると同時に、主体的、自発的な地域組織活動を実現する基盤となっている。

プログラム実施児童館の視察報告書

視察児童館	豊平児童会館（北海道札幌市）	視察日	平成28年9月16日（金）
視察実施委員等	吉村委員 北島委員	報告書作成者	北島委員
プログラム名	とよひらっぴーフェスティバルに向けての事前活動		

視察日に行われたこと

豊平地区8館合同+若者活動センターとの11月の「とよりステーション」の打ち合わせ及び既に取り組んでいる児童館より中高生をターゲットにした「とよカフェ」の報告の実行委員会を実施した。

視察実施に関する所見

今回はこれから取り組もうとしている児童館と若者活動センターとの協働事業の打ち合わせに入った。運営側より今回の趣旨説明があり

1. 各児童館で行っているとよカフェなどの取り組みの延長にあり、活動センターとの交流を通して互いに影響し合いたい
2. このイベントをきっかけにその先のつながりを持ちたい
3. イベントそのものを子ども参画でつくっていきたい。本来、今日も若者が来て打ち合わせから参加する予定だが実情としてはまだ集まっていない。

若者活動センターは15歳から34歳までの若者支援を行っていてこの年齢を視野に入れて交流できるのは札幌市ならではの事

視察実施に関する所見（続き）

印象としては、まだ実行委員会の中で充分話が煮詰まっていない。この事業の内容もよく理解されていない印象があった。むしろ今日がその日であった。

今までの経験が全体のものになっておらず、改めて何でこの事業をやるのか？若者に声をかけるにしても、このイベントで何を求めていくのか？各児童館の中高生も何を一緒にやりたいのか？など、もう一度、このイベントの位置づけや意味について話し合いが続いた。

視察当日は、事業そのものは見れなかったが、はじめから職員達の合意形成のプロセスにかかわれたのはとても貴重な体験であった。ただやはり、視察日が適当であったかは疑問が残った。

子ども参画にこだわってその第一段階としての声かけをすることや、今までの経験から中高生プログラム作りをしている点、地域の施設との連携を模索している点、この取り組みの先に思いがいつている点など、調査研究を意識した取り組みにしていこうとしているとは思った。

委員から、ぜひ考え方を一致させその成果と課題を出してほしいと提案した。

報告書を意識したうえで、プログラム作りに関してもう少し突っ込んで中高生にとっての「あそび」の意味と成果を出してほしいと提案した。

児童館に関する所見

活動そのものを見れなかったのが残念である。

その中でも、各館で行われている「とよカフェ」の取り組みは、中高生のアイデアを重視しながらかなり楽しく行われている様子が語られた。中高生ならではの問題と課題をつかみながら彼らと共に活動している職員に好感を持った。

この先「とよカフェ」がどのように中高生の主体的なものになっていくか期待したい！

ただ、やはりここでも中高生ならではのあそびの捉え方がまだ充分ではない様に思った。

その他

夜の集まりで こんな風に合同でやる意味を確認しながら話し合う場があることはうらやましい。
各館の状況やこの先についての意見交換を出来る意義は大きい。

さらに、この地域の子ども達の様ざまな問題を共有したり、行動を提起していけたら遊育環境づくりの要になると思った。

プログラム実施児童館の視察報告書

社会保障審議会児童部会
第8回遊びのプログラム等に関する専門委員会

資料
2

平成28年10月17日

視察児童館	キッズランド児童館（鹿児島県南さつま市）	視察日	平成28年9月17日（土）
視察実施委員等	中川委員 松田委員	報告書作成者	中川委員
プログラム名	造形遊び、運動遊び、親子遊び、子育て支援		

視察日に行われたこと

- ①子育て支援プログラム「ハッピーママサロン」の実施
 - ②「おしゃべり会」と地域活動組織「紙ふうせん」の朗読劇などのプログラムの実施
- ※その他、当日は同一法人の保育園行事「祖父母とのふれ合い会」も行われた。

視察実施に関する所見

①子育て支援「ハッピーママサロン」について

アドバイザー（地域活動組織のメンバーと市子育てアドバイザー、老人会副会長の3名）が子育て中の母親たちの悩みに対して、自身の経験も織り交ぜながら助言する。

当日は、4人の母親から今悩んでいること気になっていることとして、家事と子育て、自己主張し始めた2歳児や果物を食べない1歳児、弟（1歳児）へのあたりが強い兄（3歳児）について話があり、それに対し3名のアドバイザーがそれぞれの知見と経験に基づき母親の気持ちに寄り添い、話を返していく。するといつの間にか全員がほころんでいく、そんなサロンであった。

今後は、このサロンに加えて母親同士でお互いを支えていく、そんな当事者グループの活動があれば、一層この地域における子育て環境は充実していくものと思われる。児童館の取組の進展を期待したい。

視察実施に関する所見（続き）

②「おしゃべり会」による朗読劇「うさぎとかめ」について

地域の60歳以上の方たちで始めたボランティアグループ。今年で結成18年目を迎え平均年齢は83歳とのこと。普段は子どもの遊び場の安全点検や登下校時の声掛け運動、児童館行事の支援等の活動を行っている。当日の演目「うさぎとかめ」では、うさぎ組とかめ組に分かれて元気なやり取りを見せてくださった。鑑賞している子どもたちが優しい眼差しでステージのお年寄りを見つめている様子から、普段からの交流が見て取れた。

③地域活動組織「紙ふうせん」による朗読劇「さるかに合戦」について

「紙ふうせん」は母親を中心に構成された地域活動組織であり、日常的には地域の子どもの見守り・健全育成活動への取組を始め、様々なイベントにもボランティア出演・参加しているとのこと。

当日披露された朗読劇は昔話の伝承を願って、練習を重ねてきたとのことであり、大変聴きごたえ見ごたえのあるものであった。集まった子どもたちはもとより、保護者や地域住民の方たちが熱心に見入っていたのが印象的であった。朗読劇は子どもたちへの指導も行っているとのこと、ぜひ子どもと大人の世代を超えたコラボレーションを実現してほしいものである。

取り組みに関する視点

・宿泊活動やスポーツ鬼ごっこの取組における意見表明の機会提供、基礎体力の向上、危険回避や低年齢児へのいたわり、コミュニケーション能力・チームワークの向上などを通して、子どもの視点・意見の取り入れや、成長発達段階に応じたプログラムの持つ意味の認識がなされていた。

児童館に関する所見

保育園併設の民設民営、合わせて放課後児童クラブも実施。

法人役員の構成、今回のプログラム実施にあたっての企画・実行委員会のメンバーを見ると地域の関係者が多く名を連ねており、また、視察当日も多数の地域住民の方が来訪されており、地域との密接な関係が窺えた。また児童館からも地域の高齢者等の福祉施設を訪問し子どもたちと高齢者との交流を図っている。

子育て支援については、保育園併設の児童館ということもあり、保育園の物的・人的資源も活かしながら、地域住民の力を活用して児童館活動の大きな柱として取り組んでいる。

その他

南さつま市でただ一つの児童館とのこと、組織的にも財政的にも大変厳しい中、常に児童館事業の拡充を目指している姿勢は注目すべきものがある。今回の「モデル事業」もそんな前向きな姿勢があつてのエントリーであり、企画実践内容にも強い意気込が感じられる。今後の更なる発展を期待したい。

プログラム実施児童館の視察報告書

社会保障審議会児童部会
第8回遊びのプログラム等に関する専門委員会

資料
2

平成28年10月17日

視察児童館	たかつかさ児童館（京都府京都市）	視察日	平成28年9月21日（水）
視察実施委員等	中川委員 松本係員	報告書作成者	中川委員
プログラム名	みんなで「わっしょい！」和太鼓、民舞、ダンスにトライ		

視察日に行われたこと

児童館におけるおどり・和太鼓を通じた地域・多世代交流活動プログラムを実施した。

視察実施に関する所見

当日は、和太鼓の取組みという共通点はあるが、対象者が違う二つのプログラムが実施された。

一つ目は、幼児と保護者が参加する和太鼓の取組である。児童館の幼児対象のプログラム而言えば、平日の午前中の実施が一般的であるが、本プログラムの実施時間帯は平日の午後3時30分からである。これは、放課後児童クラブの子どもたちが帰って来るまでの「空白時間」をなくしたいとの思いからの事。11組の親子が参加、インストラクターの掛け声を受けて幼児たちの太鼓の音が遊戯室に響き渡る。子どもたちの太鼓を聴きながら母親たちの会話も弾む。音楽遊びの要素はもちろんのこと子育て支援の要素も垣間見える。

二つ目は障害のある児童による和太鼓の取組である。もともと小学生対象の和太鼓のクラブはあるのだが、障害のある児童がいきなりその中に入っていくのは難しいところもあり、まずは障害のある児童が練習できる場を作ろう、そしてもちろんその先には障害のある児童もない児童も共に和太鼓がたたける場面を視野に入れているとのこと。参加者は4名と予定していたよりも少ないとの事であったが、インストラクターのきめ細かな指導もあり、ひとり一人が楽しく和太鼓をたたいていた。

取り組みに関する視点

上記のプログラムは、今回の児童館におけるおどり・和太鼓を通じた地域・多世代交流活動プログラムの一部である。他に小学生や土曜日の夕方を中心にした中高生のプログラムも取り組まれており、地域のお祭りや、全市レベルでの子どもイベントへの合同での出演・参加が計画されている。

障害のある児童がゆっくりしっかりと取り組める環境をつくるとともに、他の児童たちとのコラボレーションも用意されているわけである。更に幼児から中高生までの多世代交流はもとより、近隣の児童館にも活動の呼びかけを行い取組の活性化を図っていくとの姿勢は大いに評価したい。

今回のモデル事業は児童館のあり方について、かねてから考えていた「地域交流活動」「多世代交流活動」「障害のある児童の遊び文化・統合育成活動」を実際に行う機会としてとらえており、調査研究を目的とする認識はあると考えられる。

児童館に関する所見

児童館にて放課後児童クラブを実施しており、ともすれば児童館本来の地域児童全体への取組が弱くなる中、たかつかさ児童館においては、午前中の子育て支援、午後からの自由来館児童、更に中高生を対象にした「夜間開館」等、児童館として全方位的な取り組みを展開している。また、たかつかさ児童館では、多くの高校生・大学生ボランティアが活躍しているが、小学生時代に児童館を利用していた子どもたちが成長して、高校生や大学生になった今ボランティアとして活動している姿は、児童館において切れ目のない育成が可能であることを実証している。

その他

決して大きいとは言えない児童館であるが、部屋の造りに様々な工夫と仕掛けが施されており、色んなところに子どもが居て、色んなところから子どもが出てくる、そして、たくさんのボランティアが子どもたちと一緒に遊び、過ごしてくださる。たかつかさ児童館は子どもたちにとって居心地の良い子どものための居場所であることは間違いない。

プログラム実施児童館の視察報告書

視察児童館	新座市児童センター（埼玉県新座市）	視察日	平成28年8月20日（土）
視察実施委員等	鈴木委員長	報告書作成者	鈴木委員長
プログラム名	あそびサイエンス		

視察日に行われたこと

「星のプログラム」について、子ども達の意見を聞く場として「子ども会議」を実施した。

視察実施に関する所見

① 調査研究業務委託事業への参加動機について

新座市児童センターを運営している「NPO法人新座子育てネットワーク」は、市内の児童センター2施設の指定管理を受託している。

子どもの日常生活は科学技術に囲まれているが、子どもたちが科学的な好奇心に目覚めているとは言いがたい。現代社会に生きている子どもたちにとって、科学的感性が生活に根付くことは重要である。

したがって、児童厚生員の科学遊びの技術向上と児童センターの環境整備を図りながら、科学と出会う身近な機会を児童センターが創出し提供することを目的として「あそびサイエンス」を企画し、当該調査研究業務委託事業に応募した。

② 「あそびサイエンス」参加対象児童と勧誘方法

小・中学生を主な参加対象とし、低学年児童等には保護者同伴とした。ボランティアには高校生を含めている。星空観察やプラネタリウムなど宇宙科学に興味のある児童を中心に勧誘して委員を募る。当日は台風の影響による大雨のため委員の出席が悪く、館内の高校生にも急遽声かけをする。

視察実施に関する所見（続き）

③当日の「子ども会議」の実施状況

館内アトリエ室にマットを敷き座布団代わりにする。館長の進行により、6名（小学3年生1名、中学3年生1名、高校1年生1名、高校3年生3名）と担当職員1名で会議を始める。冒頭、館長より「あなたが作りたいプラネタリウムのプログラム案について話し合っ、具体案を決めることが会議の目的です。」と、趣旨説明をした。

高校3年生の3名は支援学級の子どもたち。他の委員の意見に驚いたり、冗談を言ったりしながら楽しげであった。

小学3年生男子が、①ギリシア神話に登場する星座はどのような星か？②惑星が消滅したら太陽系宇宙はどうなるのか？③自分の生まれ月と星座の関係等をプログラム案として提案した。宇宙に対する知見の深さ、認知力、表現力は抜群で意見の端々から母親の影響を感じさせられた。

高校1年生の女子は浴衣を着てきちんと正座し、他の児童の意見を補足しながらまとめていく調整力の高さに感心させられた。

児童館に関する所見

キャンプ場（屋外隣接）、プラネタリウム（2階）、ステージ付きのプレイルーム、駐車場29台を要する児童センターである。

バーコードによる「モリモリメンバーズカード登録シート」により一人ひとりを管理できる。

6人掛けテーブルが6卓おける広いロビーで、中学生が「カードゲーム」、高校生が「百人一首」と三々五々思い思いに過ごしていた。

地域の児童センターとしては恵まれた施設である。

「星空観察会」「お父さん盛上げ隊」、隣接農家との農業体験交流など、地域に拓かれた活動を多彩に展開している。

今回企画提案されたプログラムをどのように日常活動に具現化して行くのか参考にさせて頂きたい。

その他

当該調査研究業務委託事業については、他のNPOからの情報提供を真摯に受け止めた。同時期に、館長代理もインターネットで情報をキャッチし、館長と相談して応募を決定したとのこと。

館長、館長代理が草案として「遊びサイエンス」のコンセプトを発案。他職員と企画内容を検討し、子どもたちに提案した。今後、子どもの意見を企画に反映しながら進行していく予定という。

当日は館長が進行役、担当職員が専門知識を提供。当日参加は小・中・高生6人と少人数であったが予想外の悪天候や、児童センターの他職員3人が随時参加していく様子を見ていると、全員が事業を認知していることがうかがえた。

プログラム実施児童館の視察報告書

視察児童館	さぬきこどもの国（香川県高松市）	視察日	平成28年8月26日（金）
視察実施委員等	鈴木委員長 田口専門官	報告書作成者	鈴木委員長
プログラム名	「行きまっせ！ さぬきこどもの国 うどん県巡業」		

視察日に行われたこと

「遊びのプログラム」参画の県内児童厚生員がさぬきこどもの国に集まりプログラムを推敲する実行委員会を実施した

視察実施に関する所見

- ① さぬきこどもの国の当該調査研究業務委託事業への参加動機について
大型児童館の使命として、さぬきこどもの国で好評を博したプログラムを県内の地方3か所を拠点に実施することで、地域児童館の活性化と併せて、地方の住民に高松市に設置されている「さぬきこどもの国（県立児童館）」の活動の周知を図るため。
また、企画段階から地域の児童厚生員とこどもの国スタッフが関わることで、相互理解と全県一体となって健全育成の広報・啓発を進めることへの連帯意識の向上を図ることである。
- ② 実施プログラムへの子ども参加の態様について
香川県内3会場で、当該地域に在住する子育て家庭を中心した方々を各会場200名募集し、代表による地域実行委員会を結成する。
それぞれ当該地域ごとにプログラムの構成と推敲を図る。
こどもの国スタッフが運営支援する。

視察実施に関する所見（続き）

③視察時のプログラム実施状況

モデル児童館の実行委員会を27児童館で結成。当日の参加委員は14名。

実行委員会をさぬきこどもの国が主催して開催すると共に、全県を3ブロックに分けて3会場で地域特性を演出したステージ企画案で実施することとする。そのため視察日の実行委員会も後半は3ブロックに分かれて分科会で進行された。

④「第一回モデル児童館実行委員会」オブザーバー参加の所感

会議は全体会と分科会の二部構成で進行された。

すべての協議の終了後、委員会の結論として、3地域ごとに地域児童の参加を呼び掛けて地域実行委員会を開催、当日の具体的プログラム立案の検討会を実施することになった。

スタッフの明快な説明と司会進行、和気あいあいとした分科会の雰囲気の中で、小豆島地域は特産品オリーブを企画の中心に、志度地域は忍者あそび、宅間地域は楽器演奏等、それぞれの特徴を提案し合っていた。

地域児童館と県立児童館の職員間の意思の疎通、相互理解という事業目的の半分は達成しつつあると感じた。

児童館に関する所見

さぬきこどもの国は、香川県の高松空港の南に滑走路に沿って隣接し、公園や自転車コースを始めプラネタリウムや大型遊具設備や実物YS11飛行機も備えた、香川県唯一の県立大型児童館であり、子どもの最善の利益を保障し県内全体の健全育成機能を果たすことを目的としている。

空港隣接という特殊な立地条件により県内外の耳目は集めているが、子どもが日常的に単独で遊びに来られる場所ではない。幼稚園・保育園、学校、子ども会などの遠足場所か、家族連れでマイカーにより訪れる子どもを対象とした行楽施設という色合いが強い。

児童館に関する所見（続き）

児童館は接触可能展示の常設と共に、美術・科学・音楽の工房を備え、それぞれに卓越した職員を擁している。その特技を生かして、館内の演奏やクラブ活動以外にも、県立児童館の目的である地域児童館の巡回による、質の高いオリジナリティ溢れるプログラムの普及・啓発に力を入れている。

今回の遊びのプログラムによって、地域児童館との紐帯を深め、県内一体となって、子どもの健全育成に実証的に資するプログラムの浸透を図ることで、県立児童館としての意義を高めることを目的としている。

その他

①「モデル児童館」実施に至る経緯

香川県担当課からさぬきこどもの国に情報提供があり、園長が参加意思をもって育ち支援課長と3人のリーダーに相談し、積極的賛同を得て応募を決定したという。

「第1回モデル児童館実行委員会」の運営を視察すると、県立児童館内の意思疎通の高さが推察される。

②実施担当者の役割

育ち支援課長とリーダー3人が遊びのプログラム案を企画して、全県下の児童館に提案した。

前記実行委員会の司会進行と遊びのプログラム実施の意図・企画案の説明を傍聴すると、育ち支援課長と3リーダーの積極性が伝わる。

27児童館が参加を表明したことと、3ブロックごとにこどもの国の3リーダーが各1名、連絡調整役として所属しての分科会の親しげで実のある協議も相互信頼の深さを実感できた。

その他（続き）

③実施ポイントの状況

指定管理の3期目にあたり、県立児童館としてのあり方を改めて見直した時に、県内児童館興隆支援の重要性に思い至った。そのためには地域児童館との紐帯を強化し連帯感を深めることが重要であり、さぬきこどもの国発信で県内児童厚生員の意見を聴取しながら、連携して遊びのプログラムを実施することの必要性を感じたそうである。

そこに、香川県の地域性、歴史文化、特産品を子どもたちのアイデンティティにするために、「うどん」を共通のモチーフとしたことは、分かりやすく子どもの自尊感情を高めるのに香川県の児童館らしいオリジナリティにあふれていると思えた。

プログラム実施児童館の視察報告書

社会保障審議会児童部会
第8回遊びのプログラム等に関する専門委員会

資料
2

平成28年10月17日

視察児童館	ももやま児童館（京都府京都市）	視察日	平成28年8月27日（土）
視察実施委員等	植木委員 田口専門官	報告書作成者	植木委員
プログラム名	「さびしいを減らしていく！！」桃山の街あったかプロジェクト		

視察日に行われたこと

「さびしいを減らしていく！！」桃山の街あったかプロジェクト

第1部「銭湯みたいな勉強部屋」

第2部「みんなおいで！いっしょにたべよ！～ももやま あったか食堂～」のプログラムを実施した。

視察実施に関する所見

一般的には、児童福祉の事業が実施される場合、その対象が限定されることが多い。しかし、本プログラムの理念は、「0歳から100歳余の人々の豊かな日々の具現化」であり、当該地域のすべての世代の人々が、互いに意識的に子どもたちにかかわれるような工夫がされているところに特徴がある。

本プログラムには、勉強部屋（学習支援）やあったか食堂（子ども食堂）といった、子どもの現代的課題に対応する内容が含まれている。これらに対応するためには、児童館の限られた人数の職員だけでは不可能であり、地域の人たちの協力が必須であることを前提としている。

プログラムを複数回実施することによって、前回参加した子どもたちが、今回のプログラムに期待をもって参加するようになっている。このような意図的な工夫が、プログラム準備と実施に対する子どもの主体的な参画を可能としている。また、このようなプログラムの繰り返しが、結果的に児童館と子どもたちとの長期的、継続的なかかわりにつながるものと推測される。

視察実施に関する所見（続き）

地域の多様な人々がプログラムに参画することによって、子どもたちが地域住民を身近に感じるきっかけとなっている。定期的、継続的なプログラムの実施が、児童館だけではない地域全体で健全育成をすすめる基盤となることが想定され、多様性に対応可能なコミュニケーション能力を必要とする子どもの成長発達に寄与することができる。

児童館に関する所見

児童館として、本プログラムのような大きな事業の実現には、当該児童館の限られた人数の職員だけでは不可能であることがわかっている。そこで、地域の人たちを児童館に集めることによって、実現可能となるようなプログラム構成としている。そのために職員は、普段から地域とのつながりを重視して日常的なかかわりを持つことを仕事の一部として認識している。

児童館の職員は、子ども支援や子育て支援に携わっている地域のマンパワー（民生委員、母親クラブなど）を把握することによって、児童館と地域との連携を可能としている。また、地域住民の会（おやじの会など）や老人会、近隣の大学などにも連携の幅を広げているため、日常的な多世代交流が生まれ、今回のようなプログラムの実現が可能となっている。

児童館だけではできないような地域福祉ニーズ（ひとり親家庭や中高生への対応など）の把握について、民生委員や社会福祉協議会のような地域の有識者と連携することによって、児童館でも把握することができるようになり、地域福祉ニーズを反映しながら児童館プログラムを実施することができる。

その他

地域住民の会（おやじの会など）、老人会、大学などは、子ども支援や子育て支援を進めるための活動拠点を地域の中を探している。彼らにとって、児童館と連携することは、活動拠点の確保に成功すると同時に、主体的、自発的な地域組織活動を実現する基盤となっている。

プログラム実施児童館の視察報告書

社会保障審議会児童部会
第8回遊びのプログラム等に関する専門委員会

資料
2

平成28年10月17日

視察児童館	豊平児童会館（北海道札幌市）	視察日	平成28年9月16日（金）
視察実施委員等	吉村委員 北島委員	報告書作成者	北島委員
プログラム名	とよひらっぴーフェスティバルに向けての事前活動		

視察日に行われたこと

豊平地区8館合同+若者活動センターとの11月の「とよりステーション」の打ち合わせ及び既に取り組んでいる児童館より中高生をターゲットにした「とよカフェ」の報告の実行委員会を実施した。

視察実施に関する所見

今回はこれから取り組もうとしている児童館と若者活動センターとの協働事業の打ち合わせに入った。運営側より今回の趣旨説明があり

1. 各児童館で行っているとよカフェなどの取り組みの延長にあり、活動センターとの交流を通して互いに影響し合いたい
2. このイベントをきっかけにその先のつながりを持ちたい
3. イベントそのものを子ども参画でつくっていきたい。本来、今日も若者が来て打ち合わせから参加する予定だが実情としてはまだ集まっていない。

若者活動センターは15歳から34歳までの若者支援を行っていてこの年齢を視野に入れて交流できるのは札幌市ならでの事

視察実施に関する所見（続き）

印象としては、まだ実行委員会の中で充分話が煮詰まっていない。この事業の内容もよく理解されていない印象があった。むしろ今日がその日であった。

今までの経験が全体のものになっておらず、改めて何でこの事業をやるのか？若者に声をかけるにしても、このイベントで何を求めていくのか？各児童館の中高生も何を一緒にやりたいのか？など、もう一度、このイベントの位置づけや意味について話し合いが続いた。

視察当日は、事業そのものは見れなかったが、はじめから職員達の合意形成のプロセスにかかわれたのはとても貴重な体験であった。ただやはり、視察日が適当であったかは疑問が残った。

子ども参画にこだわってその第一段階としての声かけをすることや、今までの経験から中高生プログラム作りをしている点、地域の施設との連携を模索している点、この取り組みの先に思いがいつている点など、調査研究を意識した取り組みにしていこうとしているとは思った。

委員から、ぜひ考え方を一致させその成果と課題を出してほしいと提案した。

報告書を意識したうえで、プログラム作りに関してもう少し突っ込んで中高生にとっての「あそび」の意味と成果を出してほしいと提案した。

児童館に関する所見

活動そのものを見れなかったのが残念である。

その中でも、各館で行われている「とよカフェ」の取り組みは、中高生のアイデアを重視しながらかなり楽しく行われている様子が語られた。中高生ならではの問題と課題をつかみながら彼らと共に活動している職員に好感を持った。

この先「とよカフェ」がどのように中高生の主体的なものになっていくか期待したい！

ただ、やはりここでも中高生ならではのあそびの捉え方がまだ充分ではない様に思った。

その他

夜の集まりで こんな風に合同でやる意味を確認しながら話し合う場があることはうらやましい。
各館の状況やこの先についての意見交換を出来る意義は大きい。

さらに、この地域の子ども達の様ざまな問題を共有したり、行動を提起していけたら遊育環境づくりの要になると思った。

プログラム実施児童館の視察報告書

社会保障審議会児童部会
第8回遊びのプログラム等に関する専門委員会

資料
2

平成28年10月17日

視察児童館	キッズランド児童館（鹿児島県南さつま市）	視察日	平成28年9月17日（土）
視察実施委員等	中川委員 松田委員	報告書作成者	中川委員
プログラム名	造形遊び、運動遊び、親子遊び、子育て支援		

視察日に行われたこと

- ①子育て支援プログラム「ハッピーママサロン」の実施
 - ②「おしゃべり会」と地域活動組織「紙ふうせん」の朗読劇などのプログラムの実施
- ※その他、当日は同一法人の保育園行事「祖父母とのふれ合い会」も行われた。

視察実施に関する所見

①子育て支援「ハッピーママサロン」について

アドバイザー（地域活動組織のメンバーと市子育てアドバイザー、老人会副会長の3名）が子育て中の母親たちの悩みに対して、自身の経験も織り交ぜながら助言する。

当日は、4人の母親から今悩んでいること気になっていることとして、家事と子育て、自己主張し始めた2歳児や果物を食べない1歳児、弟（1歳児）へのあたりが強い兄（3歳児）について話があり、それに対し3名のアドバイザーがそれぞれの知見と経験に基づき母親の気持ちに寄り添い、話を返していく。するといつの間にか全員がほころんでいく、そんなサロンであった。

今後は、このサロンに加えて母親同士でお互いを支えていく、そんな当事者グループの活動があれば、一層この地域における子育て環境は充実していくものと思われる。児童館の取組の進展を期待したい。

視察実施に関する所見（続き）

②「おしゃべり会」による朗読劇「うさぎとかめ」について

地域の60歳以上の方たちで始めたボランティアグループ。今年で結成18年目を迎え平均年齢は83歳とのこと。普段は子どもの遊び場の安全点検や登下校時の声掛け運動、児童館行事の支援等の活動を行っている。当日の演目「うさぎとかめ」では、うさぎ組とかめ組に分かれて元気なやり取りを見せてくださった。鑑賞している子どもたちが優しい眼差しでステージのお年寄りを見つめている様子から、普段からの交流が見て取れた。

③地域活動組織「紙ふうせん」による朗読劇「さるかに合戦」について

「紙ふうせん」は母親を中心に構成された地域活動組織であり、日常的には地域の子どもの見守り・健全育成活動への取組を始め、様々なイベントにもボランティア出演・参加しているとのこと。

当日披露された朗読劇は昔話の伝承を願って、練習を重ねてきたとのことであり、大変聴きごたえ見ごたえのあるものであった。集まった子どもたちはもとより、保護者や地域住民の方たちが熱心に見入っていたのが印象的であった。朗読劇は子どもたちへの指導も行っているとのこと、ぜひ子どもと大人の世代を超えたコラボレーションを実現してほしいものである。

取り組みに関する視点

・宿泊活動やスポーツ鬼ごっこの取組における意見表明の機会提供、基礎体力の向上、危険回避や低年齢児へのいたわり、コミュニケーション能力・チームワークの向上などを通して、子どもの視点・意見の取り入れや、成長発達段階に応じたプログラムの持つ意味の認識がなされていた。

児童館に関する所見

保育園併設の民設民営、合わせて放課後児童クラブも実施。

法人役員の構成、今回のプログラム実施にあたっての企画・実行委員会のメンバーを見ると地域の関係者が多く名を連ねており、また、視察当日も多数の地域住民の方が来訪されており、地域との密接な関係が窺えた。また児童館からも地域の高齢者等の福祉施設を訪問し子どもたちと高齢者との交流を図っている。

子育て支援については、保育園併設の児童館ということもあり、保育園の物的・人的資源も活かしながら、地域住民の力を活用して児童館活動の大きな柱として取り組んでいる。

その他

南さつま市でただ一つの児童館とのこと、組織的にも財政的にも大変厳しい中、常に児童館事業の拡充を目指している姿勢は注目すべきものがある。今回の「モデル事業」もそんな前向きな姿勢があつてのエントリーであり、企画実践内容にも強い意気込が感じられる。今後の更なる発展を期待したい。

プログラム実施児童館の視察報告書

社会保障審議会児童部会
第8回遊びのプログラム等に関する専門委員会

資料
2

平成28年10月17日

視察児童館	たかつかさ児童館（京都府京都市）	視察日	平成28年9月21日（水）
視察実施委員等	中川委員 松本係員	報告書作成者	中川委員
プログラム名	みんなで「わっしょい！」和太鼓、民舞、ダンスにトライ		

視察日に行われたこと

児童館におけるおどり・和太鼓を通じた地域・多世代交流活動プログラムを実施した。

視察実施に関する所見

当日は、和太鼓の取組みという共通点はあるが、対象者が違う二つのプログラムが実施された。

一つ目は、幼児と保護者が参加する和太鼓の取組である。児童館の幼児対象のプログラム而言えば、平日の午前中の実施が一般的であるが、本プログラムの実施時間帯は平日の午後3時30分からである。これは、放課後児童クラブの子どもたちが帰って来るまでの「空白時間」をなくしたいとの思いからの事。11組の親子が参加、インストラクターの掛け声を受けて幼児たちの太鼓の音が遊戯室に響き渡る。子どもたちの太鼓を聴きながら母親たちの会話も弾む。音楽遊びの要素はもちろんのこと子育て支援の要素も垣間見える。

二つ目は障害のある児童による和太鼓の取組である。もともと小学生対象の和太鼓のクラブはあるのだが、障害のある児童がいきなりその中に入っていくのは難しいところもあり、まずは障害のある児童が練習できる場を作ろう、そしてもちろんその先には障害のある児童もない児童も共に和太鼓がたたける場面を視野に入れているとのこと。参加者は4名と予定していたよりも少ないとの事であったが、インストラクターのきめ細かな指導もあり、ひとり一人が楽しく和太鼓をたたいていた。

取り組みに関する視点

上記のプログラムは、今回の児童館におけるおどり・和太鼓を通じた地域・多世代交流活動プログラムの一部である。他に小学生や土曜日の夕方を中心にした中高生のプログラムも取り組まれており、地域のお祭りや、全市レベルでの子どもイベントへの合同での出演・参加が計画されている。

障害のある児童がゆっくりしっかりと取り組める環境をつくるとともに、他の児童たちとのコラボレーションも用意されているわけである。更に幼児から中高生までの多世代交流はもとより、近隣の児童館にも活動の呼びかけを行い取組の活性化を図っていくとの姿勢は大いに評価したい。

今回のモデル事業は児童館のあり方について、かねてから考えていた「地域交流活動」「多世代交流活動」「障害のある児童の遊び文化・統合育成活動」を実際に行う機会としてとらえており、調査研究を目的とする認識はあると考えられる。

児童館に関する所見

児童館にて放課後児童クラブを実施しており、ともすれば児童館本来の地域児童全体への取組が弱くなる中、たかつかさ児童館においては、午前中の子育て支援、午後からの自由来館児童、更に中高生を対象にした「夜間開館」等、児童館として全方位的な取り組みを展開している。また、たかつかさ児童館では、多くの高校生・大学生ボランティアが活躍しているが、小学生時代に児童館を利用していた子どもたちが成長して、高校生や大学生になった今ボランティアとして活動している姿は、児童館において切れ目のない育成が可能であることを実証している。

その他

決して大きいとは言えない児童館であるが、部屋の造りに様々な工夫と仕掛けが施されており、色んなところに子どもが居て、色んなところから子どもが出てくる、そして、たくさんのボランティアが子どもたちと一緒に遊び、過ごしてくださる。たかつかさ児童館は子どもたちにとって居心地の良い子どものための居場所であることは間違いない。